●──東アジア

地域理解の上で問題分析

高橋五郎（たかはし・ごろう）
愛知大学大学院中国研究科教授、河南財経政法大学（中国）兼職教授

地域研究者の軌跡

①生年・出身地……一九四八年、新潟県

②専門分野・地域……中国地域研究

③学歴……愛知大学法経学部（経済学専攻）、千葉大学大学院自然科学研究科（生産科学専攻）

④職歴……農林水産省外郭団体（二四歳、一一年間）、研究機関主任研究員（三六歳、九年間、この間に博士課程在籍）、大学教授（四五歳、一八年間）

⑤現地滞在経験……長期滞在経験なし

⑥研究手法……フィールド調査は、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ポーランド、タイ、ミャンマー、ベトナム、フィリピン、マレーシア、シンガポール、台湾、オーストラリア、インド、中国など。主なフィールドは中国農村。

⑦所属学会……国際農業経済学会、中国経済学会（アメリカ）、香港経済学会、中国経済学会（日本）、アジア政経学会（日本）、日本協同組合学会

⑧研究上の画期……中国の市場経済への転換とソ連崩壊

⑨推薦図書……宮本常一『忘れられた日本人』（岩波文庫、一九八四年）、加々美光行『中国の新たな発見』（日本評論社、二〇〇八年）、高橋五郎『国際社会調査――中国・旅の調査学』（農林統計協会、二〇〇七年）

メッセージ

私は内外の農業問題に関心があった。そして農村調査がとても好きであった。学部生の頃から、「農村調査」という言葉の響きには、自分が新しい学問の世界に踏み込んでいるのだという実感が湧いたものだ。

その結果、国内では北海道から沖縄まで全国を踏破し、多くの地域の農民を調査し田畑の様子や農作物を観て触ることになった。田畑の土を握り、土の匂いを嗅ぐ習慣はすでに身に付いていた。

これと同じことを中国農村でもやっているし、中国以外の国でもやってきた。私の地域研究は農業問題を比較研究することだから、農村調査は不可欠だ。したがって私にとっての地域研究とは、地域を研究することというより地域で研究するということだ。中国農村の現場に立つと必ず日本の農村の様子が目に浮かぶし、日中の農民の顔の表情のなんと似ていることかと想う。少しだけ翳を持ってはいるが、笑い方は大きく嘘のない顔だ。実は、農民の顔に国境はないのである。イタリアの農民、タイの農民、アメリカの農民、みなよく似た表情だ。私にとって、地域研究の魅力のひとつはこの点に気付いたことだ。

中国で農村調査するときは、かならず自分流の仮説を立てる。調査には仮説探索型と仮説検証型とがあるが、私の場合ほとんどが後者だ。そのために方法論は大事だ。

方法的には中国研究と原論上の農業問題研究を切り離している。中国研究とは中国経済や政治、文化・社会など中国研究者として持つべき中国に関する学問的な一般的常識のことであり、原論上の農業問題研究とは農業問題分析の理論的、技法的方法論のことを指す。前者は特殊中国的研究であり、後者は一般的農業問題研究である。前者は後者の前提であり、そのうえで後者が成り立つ。

したがって私の中国農業問題研究の方法は、「中国の農業」を研究するのではなく、中国に付着して、あるいはそこを舞台に演じられている農業を研究するのである。ここから、農業問題を国や地域間の比較研究として取組む道筋が自ずと生まれてくる。

原論上の農業問題研究では、分析上の方法として、とくに農産物価格論、地代論、土地資本論、土壌学、水利科学、農業簿記、農地制度論（農地制度史を含む）、地域産業論が重要だと思う。院生のときは、とくにこれらに注目して研究した。

大学院に籍を置いている間は、指導教官の思考方法や枠組みを知る努力が非常に重要なことだと思う。地域研究は研究対象国によって方法論が異なる。異なるどころか、国際学界で認知された統一的方法論がないのが地域研究の現状だ。それだけに指導を受けている教官の方法を知ることが、その後の飛躍のためにも大切である。